**№24　テーマ『人格を磨く』**

**講話日2009年10月19日**

**皆さん、こんにちは。だいぶ秋も深まってきました。というか、ようやく中秋という感じですけど、今年もやっぱりもみじがだいぶ遅いようで、だいぶ気候も昔から比べると変わってきましたね。とにかく、今は大きな変動の時代で、激動の時代にどう対処していくかというのが、どの企業も難しい段階かと思うんですけど。でもやっぱり、その基本は仕事をしている人たちがどれほど消費者というか、社会から信頼され信用されるかということが、大きなやっぱり企業の課題になってきております。どんなに高いレベルの技術を持っていても、仕事をしている人たちに信頼性がなければ、もう一つ仕事が発展しない、そういう企業が多いわけです。技術ももちろん大事なんですけど、それ以上に社会的な価値として大事なのは、社員の方一人ひとりの人間的な信頼・信用というものが、どの程度身についたものになっているか。これが大事な現実の課題になってきていると思います。**

**そういう意味で今日は、「人格を磨く」。どういう風にしたら人間性を成長させることができるか。人間性という、個性ということも内容にはあるんですけど、自分が駄目だから自分を変えようとする意識は、自分に対して否定的なものなので、それは持つ必要はありません。大事なことは今のままの自分を肯定しながら、今の自分を成長させようかという意識で自分のこれからの努力の仕方というのを考えていただきたいと思うんです。人格を磨くためには、まずは人格をつくれないと人格を磨けませんので、前回は人間として本物とは何なのか、人間の格を持つためにはどういうことが要求されるのか。ということを話したわけです。いわゆる、犬猫ではない人間が人間としての格のある生き方をするためには、何が基本的に求められるのか。ということを前回、お話をしました。**

**その内容としてはレジメに書かせていただきましたけど、人間の格というのはまずその不完全性の自覚から滲み出る謙虚さというものが要求される。傲慢になったとき、人間は人間であることに根底から失格する。だから、人間らしい心とは、謙虚な心である。その謙虚な心というものをどうつくるか、これは人間の格というものをつくっていく上で根本の大事な課題と言わなければなりません。人間は不完全だと言われていますが、不完全性の自覚というものを自分が常に持って、謙虚な、傲慢ではない態度でいろんなことに対応することができるか。まずは基本的な大事なことです。傲慢さほど恐ろしいものはないし、醜いものはない。人間が失脚・失敗するとき、全て傲慢さが根底にある。人間の格をつくる第一原理は、まずは不完全性の自覚から滲み出る謙虚な心だ。**

**その次は、成長意欲。人間としてもっともっと成長したいという思い、そういう思いのない人間は、人間として本物とは言えない。不完全なのだから不完全でいいのでは、と言うようでは批判・非難をされますから、不完全であることはもちろん大事な自覚なのですけど、だけど不完全でありながらも人間は完全なもの・完璧なるもの・絶対なるものを意識することができる。だから不完全でありながらも常により以上のものを求めていく、という成長意欲を持っていないと、仕事も発展しない・会社も発展しない・自分も成長できないということにあります。第二番目に大事なのは、いろんな意味で成長意欲があるかどうか、これも現実社会の中でちゃんと生きていくことができる、金を儲けてちゃんと生きていくことができるという力をつくっていくための基本原理となるわけです。いろんな意味で成長意欲を持っていないと、人間としての値打ちのある生き方というものをつくっていけない。成長意欲を違った言葉で言えば、自己実現という言い方もしますけども、とにかくは自分自身を限りなく成長させていく努力。これも人間の格をつくっていくための大事な課題であります。**

**最後の三つ目の人間の格をつくっていく原理は、愛である。血の通った温かな心遣いができる。血の通った温かな心遣いをする。これが、また人間として非常に大事な課題。心を養うということをしていかないと、何事もうまくいきません。繊細な心遣い、心のいき届いた仕事の仕方、心のいき届いた人間と接し方。そういうものがやっぱり信頼・信用、社会的な信頼・信用を獲得していく非常に大事な原理。どれだけ能力があっても、愛がなければ、心遣いがなければ、その人は非難されます。また嫌われます。そういう意味で最後に人間の格を決める、締めくくりの条件は愛である。愛の力を成長させていく。愛というのは、血の通った温かな心遣いというものを仕事においても、また人間関係においてもいろんな言動において忘れてはならない気持ちであります。**

**この三つのことが意識されて、だんだん習得されていくと、人間の格は成長していく。人格ができるという構造になるわけです。人格というのは、謙虚さと成長意欲と愛という原理が絡み合って、その相乗効果として現れてくるものであります。人格という言葉、日本においての人格という言葉、またアジアで人格と言われる場合には、ある意味で立派な人という意識で使われることが多いのですよ。だけども、英語の辞書で人格という言葉を引くと、「キャラクター、パーソナリティ」という言葉が出てくる。だから、我々が日本語で人格と使っている同じ言葉は欧米にはないですね。人格という言葉は、欧米人の意識においてはキャラクター=性格、パーソナリティ=個性である。個性とか性格というのは努力して成長させていくものではないですから、欧米人は基本的に人格を磨くという概念がない。人間の格を成長させていこうという自覚的努力は、欧米人はしません。性格とか個性というのは、変化しないものとしてある、というのが常識・在り方だから、性格を成長させるとか個性を成長させて高いものにしていくということはない。個性は個性だと。皆とは違う「俺の個性」というものですから。**

**だから人格、人間性を成長させる意識は欧米人にはない。人間性は神によってつくられたものだから、人間性は変わらないというのが、欧米人の意識であります。欧米人においては、人格をもっと磨いて成長していこうという努力の仕方はないですね。もっぱら欧米人が努力するのは、能力を磨くということ。金と物を獲得する。ここに欧米人の努力は集中されている。だから欧米人の人間の価値を決定する原理は能力主義と言われて、どういう力、能力、アビリティを持っているか。それがその人の価値を決定する。その結果として、金と物が手に入っている。だから、金と物がある人、たくさん持っている人を尊敬する風潮が欧米にはあります。**

**だけど、アジアという風土は能力があるよりも、金を持っているよりも物を持っているよりも、人間性において立派な人を尊敬する。そういう風土がアジアの風土なのですね。そのアジアで使われている言葉は、人格という言葉であって、人格は尊敬に値する。これからは欧米の時代が終わる。欧米に世界の中心がある時代は終わって、これからはアジアが燃える。アジアが発展していく。アジアが発展することによって世界は成長し、また人類は進化して、そして歴史がつくられていく。これからはアジア人が欧米人に物を教えて、今の西洋文化よりもっと素晴らしい文化をこれから人類がつくっていく。そういう流れに入っているわけであります。その意味においては、仕事をする場合でも、単に仕事をするのは金を儲けるためではない。仕事をする目的は、自分自身を人間として磨くためなのだ、という労働の仕方をこれからアジア人は欧米人に教えていかなければなりません。**

**欧米人の労働観は、「労働とは苦痛である」。その苦痛に対して支払われるものが給料だ、という金銭感覚、労働感覚を持っているわけです。アジアは決してそういうことではない。労働そのものが人間を磨くという意識を強く持っております。それを道の思想というんですけど、仏教でも仏道修行というものがあります。仏道修行というのは、廊下を拭き掃除したり、庭を掃除したり、いろんな労働をするんですけど、その労働が全部自分を磨くためだ。自分を人間として成長させるためにそういう労働をするんだ、という意欲で労働を修行として用いている。そういう文化がアジアの文化です。中国においても老荘思想における天の道、儒教においては人の道、日本においては神道。このようにアジアにおいては“道”という言葉で特色のある考え方がくくられる。仕事は仕事で金儲けのため、人間を磨くのはまた別で、というわけではなく、仕事をすることそのものが、人間を磨くと考えていかなければならない。**

**人格とはなんなのか、一口で言うならば人格というのは、その人が何を意識しながら生きているか、その人の意識の内容が実はその人間の人格の内容であり、その人間の値打ちを決めると言っていいわけです。人格とは意識の内容である。ということは、その人が四六時中、損得ばかりを考えて仕事をして生活をしているようだったら、損得という価値観に縛られ、支配された人格となるわけです。またその人が正しいか間違っているかということばかりを意識しながら生きている、仕事をしているとすれば、そういう内容・次元・価値観の人格だ、と言うことができる。人格というのは、その人がどういう価値観、判断の仕方をして四六時中生きているか、ということがその人の人格の内容を決めるということになるわけです。そういう意味では、人格は意識の内容だと言わなければなりません。**

**意識というものは、言葉によって表現されるものであって、言葉によって表現されない意識は、あるかないかわからない、まだ不確定な曖昧な意識なんですね。言葉によって表現される意識というのは、具体的に仕事をしたり、あるいはさまざまな悪影響を与えるということができるようになってくる。意識は言葉によって表現されるんですけども、言葉というものは一人称二人称三人称という三次元しかない。四人称はないんですよ。なぜ言葉というのは三人称までしかなくて四人称はないのか。全人類の言葉は文法的に言うと三次元=一人称二人称三人称という三つの次元しかなくて、四人称というものは存在しません。それはなぜか。意識というものは実は自分が生きている、自分が生活している外の空間というものを映し取って、そしてその外の空間と同じ構図・構造を自分の意識の中につくり上げるというのが、意識という基本的な働きです。意識は外の世界を映し取る働きをするんだ。それで、外の世界というのは空間ですから、三次元という構造を持っている。三次元という構造を持っている外の世界を意識は映し取るという働きをしますから、必然的に意識というのは三次元という構造を持たざるを得ない。すなわち、我々が持っている内的空間と言われる意識の世界もやっぱり三次元だ。意識が三次元だから、意識を表現する言葉は三次元という構造しか持てないことになって、結果として言葉は一人称二人称三人称という三次元の次元しか持っていないことになるわけです。**

**外の世界を映し取るということは、どういうことなのかと言ったら、もうちょっと具体的に言うと、意識は外の世界を知識化する。外の世界を自分の中に知識としてつくり上げる。そういう働きをするわけです。これをもっと具体的に言うと、新しい街に移り住んでいって、自分の住む家も決まって、さぁ生活しようと思ったら一体人間は何をするのか。まずは生活に必要な銀行はどこにあるか、スーパーはどこにあるか、郵便局はどこにあるか、質屋さんはどこにあるか、いろいろ自分が生活上必要なものがどこにあるかまずは探し回るわけですよ。あれはあそこにあって、あれはそこにあってと、自分の意識の中に外の空間を地図として映し取っていく作業をする。その外の世界を自分の意識が映し取るというやり方が間違っていると、その人がなにか行動を起こす際に迷うわけです。自分の中に外の世界と同じ地図がちゃんとでき上がってないと、人間は生活に迷うわけです。実際問題、なぜ我々は勉強をしないといけないのか、なぜ我々はさまざまな知識を獲得しないといけないのか。それは知識の量は、自分自身が自由に動き回ることができる・自由度を決定するのです。あまり知らないところでは自由に動けなくて、迷ってしまったり間違ってしまったりする。よく知っていたら自由に動き回り、また世界を支配することができる。だから、勉強をするのは自分の自由のためだ。我々が自由自在に人生を生き抜いていこうと思ったら、いろんなことを知らないといけない。知らないといろんなことでつまずいてしまう。本当に正しく生きようと思ったら、その街の正しい地図・知識を持つこと。無意識的にそういう努力をしているわけです。間違えていたら、迷ってしまうから。**

**我々が学校で宇宙の構造や自然の法則を学ぶのは、それも外の世界を映し取るということ。正しく外の世界を認識するという意識の働きによって学問は成り立っていて、それを使って仕事をするのです。自分の獲得した知識が間違えていたら仕事はうまくいかない。能率の良い仕事をするためにもいろんなことを知っていないといけない。つまり、勉強をしないといけないな、ということになってくるわけです。自分が自由に羽ばたける世界を確立し、広げるために勉強をしないといけないということになってくるわけです。情報なしには自由には生きられない。これまでに述べたことをまとめて考えると、人格の三次元とは一体何になるのか。**

**人格には高さ、深さ、大きさという三つの次元が分かってくる。次元というのは、数学的に言うと縦・横・高さ。必ずしもそうなるわけではない。次元が違うとよく言いますが、次元が違うとは質が違うということ。次元が違う世界が存在するということは、質が違う世界が存在するということ。三次元の構造を持っているということは、三つの質の違う分野があるということ。そういうことを三次元というわけであります。必ずしも立て縦・横・高さに当てはまらないと三次元ではない、という意識を持っていたら駄目なんですよ。次元とは質が違う。質が違えばどんなものでも三次元ということになるわけです。そういう意味で人格の三次元とは、高さ・深さ・大きさという室の違うものが三次元としてあるということになるわけです。**

**人格の三次元はなぜ高さ・深さ・大きさとなるのか。これは人類史始まって以来、人間性とか人間の命とか人格をどのように表現してきたのかという事実を振り返っていきますと、そうすると大体今日まで我々は、「あの人はなかなか高貴なる精神の持ち主だ」とかあるいは「高尚な趣味を持っている」とか、“高い”という言葉でその人の価値を褒めたりしますし、またなかなか深いとか深淵な考えだというように、“深い”という言葉を持って褒めたりしますし、また器が大きいとか度量が大きいというように、“大きい”という言葉をもって人の値打ちを表現したりする。そのようなことをまとめていきますと、人間の格というのは三次元にまとめれば、高さ・深さ・大きさという内容になってくることが分かります。**

**だから我々が人格を磨くことをする場合には、どういう意識を持って努力をセントバーナードか。というと、どういう努力をすれば人格が良い状態になってくるのか、というと、人格の高さを求め、深さを求め、大きさを求めることによって、我々は人格を成長させて、磨くことができるんだということになってきます。社会では人格を磨くことの重要性を説くのですが、実際問題、人格を磨くことがどういうことなのかということをほとんど知りません。現実の社会で人格を磨くと言われているのは、だいたい倫理・道徳を厳しく守るようなことを言うことが多く、清廉で汚れのない生き方をしている…そういう人を人格者と表現されますが、それだけでは人格の本当の全体の内容を表現することはできません。倫理や道徳に縛られて窮屈で堅苦しい生活をしている人が多くて、人を見る目も厳しくて、やたらに人を非難・注意する。どうしても煙たく、煩わしいと思われがち。決して人格者は倫理や道徳を厳しく守るようなことではない。人格が高い、深い、大きいというのは、完璧・完全性を求めるような堅苦しいことではない。もっともっと内容的に不完全な人間の在り方をちゃんと認めるような内容が含まれている。**

**本物の人間というのは、不完全でなければならない。完全性を要求するようなことは人でなしである。本当の人間は不完全であっていいんだ、そういうことを前提として人間の本物性を考えていかなければなりませんから、もっともっと我々は、人格者であってもその内容はもっともっと現実的に気軽というか完璧さを要求するものではない。まずは人格を磨くということはどうすることなのかと言ったら、人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていく、という意識が大事なんだということをまずは覚えておいてもらいたいと思います。**

**それでは具体的に人格を磨くためにまずどういうところが入るか。まず人格には高さというものが要求されてくると、人格の高さというのは、人間が生きていくためにまずはいろんなことに対する知識を求めていくということを皆がするわけなので、そういうところから人格を磨くということが出てくることになるわけなんですけども。人格が高いとはどういうことなのか、ということ考えてみてもらいたい。感性論哲学では理屈や理性で物事を考えていくのではなくて、一番大事なのは感性の実感なんです。感性の実感というものを原理にして、そして自分の考え・理性を修正していって、そして物事の本当の姿、本当の在り方・真実を知るというのが感性論哲学のやり方です。人格の高さとは一体何なのか、どうしたらできるのかということを考えていく場合にも、まず我々が大事にしなければならないのは、「一体どういう人に自分は人格の高さを感じるだろうか」ということ。感性の実感、本音をまず思い出してもらいたいということになってきます。そういう自分の感性の実感、本音を原理にしながら、その自分の実感というものをちゃんと説明するためにはどのように考えていったら良いか。理性を働かせて実感に反しない、実感にぴったり合った考え方をつくっていく、これが感性論哲学のやり方であります。**

**そこで我々はどういう人に人格の高さを感じるか、ということを考えていくと、大人は子どもに人格の高さを感じません。子どもには人格の高い人はいないんですよ。子どもでもなかなか深いことを言ったり、心の広い子はいますが、しかし人格の高い人はいないんですよ。先進国の教育を受けた教養のあるレベルの人間が、後進国の教育を受けていない人に人格の高さを感じることはないんですよ。教育を受けていない教養のない後進国の方でも、深いことを言う方はいらっしゃいますし、心の広い方はいらっしゃるんだけど、人格の高い人はいないんです。こういう事実をさまざまに積み重ねて考えていくと、人格が高いということはどういうことなのか、結論を導いていくことができます。すなわち、人格の高さというのは、その人が持っている知識や技術や教養の量に関係する。そういうことがだんだん分かってくるわけです。**

**自分が相手に「あなたはなかなか人格の高い人ですね」と言う場合、自分よりも相手の方が知識や技術や教養の面において、何かしら自分よりもたくさん持っているということになってくる。そういうことが人格が高いということをその人に言う場合の条件になってくる。もっと大事なことは、「では、たくさん知識を持っていれば人格は高いのか」と言ったら、そういうわけではない。東大に入れば皆、人格が高いのかと言えば、そうではない。東大に入っても軽薄・軽率・軽い人間もたくさんいる。必ずしもたくさん知識を持っていれば人格が高いとは言えない。人格が高いと感じる人は、必ず自分よりもたくさんの知識や技術や教養を持っていることが条件なんだ。つまり、人格の高さということにおいて、知識の量というのは必要条件であるけどもそれだけでは十分ではない。人格が高いと言われるためには人よりもたくさんの知識を持っていることが要求されるが、それだけでは必要条件でしかない。どういう条件が整ったならば、その人は本当に人格が高いということになるのか。それを次に考えていかなければならない。本当に人格が高いと言える十分条件とは。**

**学問的なやり方から言うと、十分条件は必要条件が成り立つ根拠を探っていくと十分条件が出てくる。そういう構造になっているんです。これが学問的という考え方であります。では、人格が高いと言われるには知識の量が必要なんだけど、どういう風にして知識の量は増えるのか。ということを考えていかなければならない。知識の量は増えていくというのは、勉強して努力して増えていくんですが、結果として学校に行って学年が上がるごとにより高度な厳密な知識や高度な技術を獲得していくのが、現実の社会における知識の量の増え方なんですよ。けれども学校に行かなくても、自分で本を読んだりいろんなことをして、たくさんの知識を求めていくことを皆がするわけです。子どもでも何も言わなくても皆、自分自身でいろんなことを知りたがりますし、いろんなことを見聞きして覚えていくということをして、だんだん年を重ねるに従ってたくさんの知識を持つようになっていく。自然に放っておいてもそうなってしまう。生きるためにはどうしても正しい知識を求めていかないと生きられないので、必死になっていろんなことを知りたがるんです。とにかく、具体的には知識の量は教育によって増えていく。教育とか努力によって増えていくのは何かと言えば、教育の目的はたくさんの知識を獲得していくことにあるのではなくて、人間をつくること。人間らしい人間をつくることが教育の最終的な目標なんだ。また人間がさまざまな知識を求めていくのも人間としての格のある生活をするためなんだ。動物は体験・経験に基づいたさまざまな知識を持ってますけど、人間は言葉を使って学問的知識を求めていく。学問的知識の方が動物が持っている体験・経験に基づく知識よりも、より高度で厳密で正しい。そういうものを内容として持っているわけであります。それが人間らしい生き方というものをさせてくれるわけです。とにかくは教育の目的は、人間らしい人間をつくることである。また我々がたくさんの知識や技術を求めていくのも、人間として社会の中で生きてくためにどうしてもそれは避け難い。だから我々は別に学校に行かなくても、社会の中で生きていこうと思ったら、自分でたくさんの知識や技術を求めていく努力をしなければならない。それは結果として、最終的には人間としての生活ができるためにそうするんだ。一般的に教育というのは、人間らしい人間をつくる。格のある人間をつくる。それが教育の最終的な目標であると言うことができるわけです。**

**だけども、現実の学校において残念ながら人間らしい人間をつくることに失敗していて、たくさんの知識や技術を与えることには成功していますけども、頭の良い獣をつくると言われている。学校に行っても人間性が成長しない、学校に行っても人格は磨かれない、学校に行って獲得できるものは知識や技術や教養の量だけだ。残念ながら、現実の学校は教育に失敗している。現実の学校教育は知識教育をしても人間教育はしていない。と言えてしまう。人間は人間らしい人間になるためには、どうしても正しい知識をたくさん求めていくということをしなければならない。そのことによって人間は、人間らしい生き方ができるようにだんだんと成長していくことができるんですよ。ということはどういうことなのかと言ったら、たくさんの知識や教養を求めていく努力というのは、単にたくさんの知識や教養を獲得することに目的があるのではなくて、たくさんの知識や教養を求めていくということの最終的な目標は、人間らしい人間なるということなんだ。年齢が成長するに従って、より高度な知識や技術を求めていくというその自分の努力は、単に高度なものを求めることに目的があるのではなくて、それを通して自分自身が人間らしい人間になるために、その努力をしているんだという風に考えなければなりません。これは教育哲学的な理解の仕方なんですけど、知識や技術や教養を求める努力は、人間らしい人間をつくるためであって、単に知識量を増やすことに目的があるのではない、と考えるのが哲学的な教育の理解の仕方であります。**

**では、たくさんの知識や技術を求めていくことを通して人間をつくるとはどういうことなのかを考えていくと、我々がより高度で厳密な知識や技術を求めていく努力は、単により高度な知識を求めるだけで終わるものではなく、その先に何があるか。「俺はどこまでもより高度なもの」「俺はどこまでも厳密なものを求めていきたい」という求める喜び、価値の情熱、価値の欲求を自分の中につくり出すということが、実は我々がより高度で厳密な知識や技術を求めることの先にある目標なんだと言わなければなりません。すなわち、そのことを通して自分の中に価値の情熱、価値の欲求がその人の命に宿ったとき、その教育は人間をつくったと言えるわけです。単に知識や技術を学ぶのは知識教育であって、人間教育ではない。たくさんの知識や技術を獲得する努力が人間をつくる結果に結びつくというのは、どういうことなのかと言ったら、その教育がすべての人の心の中に価値の情熱・欲求を呼び覚まし、植えつけることができたとき、その教育は単なる知識を超えて人間をつくった、人間教育に成功したと言えるわけなんですね。**

**なぜかと言ったら、人間の本質は心だ。心とは意味と価値を感じる感性だ。だから心の中にどこまでもより高度な厳密なものを求めていきたいという価値の情熱が宿ったとき、人間らしい心ができたということになってくる。その人がどこまでもより高度で厳密なもの、どこまでもより真実のあるもの、より善なるもの、より美しいものを求めていきたいという情熱を命を宿すならば、その人は放っておいても素晴らしい人間に成長していかざるを得ない。教える必要はない、自分でより素晴らしいもの、価値あるものをどんどん吸収して求めていって学んでいく活動をする。人間をつくるとは、何をつくることなのかと言ったら、その人の心の中に価値への情熱を宿らせることなのだ。求めていきたいという欲求をその命の中に持たせることが、人間をつくるということなんだ。人間の心の中にどこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求め続けていきたいんだという気持ちを持たせることが、人間をつくるということなんだ。それができなかったら、その教育は人間教育ではない、単なる知識教育である。実際問題、全社員がどこまでもより高度なもの、より厳密なものを求めていきたい、どこまでもより真なるもの、より善なるものを求めていきたいんだという気持ちを持ったら、どんなにすごい会社ができるか。学校教育だけではなくて、社員教育においても人間教育=価値の情熱を宿らせることを最終的な目標にしなければならない。それができなければ、社員教育は失敗の教育だ。どんなに高度で素晴らしい能力を持ったとしても、その会社は事業に失敗しますよ。心の中に価値の情熱がなければ、持っている知識や技術は傲慢さとなり、武器となって却って知識や技術のない人間を軽蔑したり、お客さんをバカにしたり、あるいはお客さんから嫌われたり、人間性においてお客さんを満足させることはできません。素晴らしい仕事ができる、並以上の人間になりたいと願うならば、まずは人格の高さ、どこまでも高度なもの、厳密なものを求めていきたいという意欲を持って仕事をしなければ満足させることはできませんし、成長も本当には自分のものにすることはできません。より高度なものを身につけることの醍醐味、喜び、より厳密なものを自分のものにすることの素晴らしさを知ることによって、よりそうなれるわけです。**

**また、どこまでも真実のあるもの、どこまでも美しいものを求めていきたいと気持ちが、高貴なる精神、高く尊いものであって、真・善・美を求める心情が人間の品格をつくる、と言うことができる。品格こそまさに人格の素晴らしさというか人格を磨くことによって出てくる人間の価値であります。人間の品格とは、真・善・美を求める心だ。真・善・美を求める心が人間の品格をつくる。そういう品格を社員、仕事をしているプロは、客に感じさせなければならない。客に品格を感じさせることによって、「またあの人に頼もう」という気持ちにさせて、会社が限りなく発展し、存在し続けることができることになるわけです。人格の高さとは、別の言葉で言えば高貴なる精神だ。高く貴い聖なる精神が人格の高さだ。高貴なる精神とは何なのか。それは、どこまでもより高度なもの、より厳密なものを身につけることの醍醐味・喜び・素晴らしさを命が知ったとき、どこまでもより高度なもの、より厳密なものを求めていきたいという欲求が湧いてくる。自分の身の回り、生活する場所、会社を美しくする。美しくなった状態の環境の素晴らしさ、気持ち良さを感じることによって「もっと○○したい」という気持ちが湧いてきて、より素晴らしい人間となっていく。それが高貴なる精神と言えるものであります。本当に我々が仕事上、求められてくる人格の高さ・高貴なる精神、客に感動を与えるような仕事の仕方というのを求めようとするならば、自分は「価値の情熱を持って仕事をしているか」「より高度なもの、厳密なものを求めていきたいと思っているか」「そういう気持ちを持って生きているか、生活をしているか」を自分に問わなければならない。もし、自分の中に価値への情熱がなかったら、求めていきたいという意欲がなかったのならば、残念ながらその人は人格の高さとは無縁の人物であります。どこまでもより真・善・美を求めていきたい、どこまでも高度なもの、より厳密なものを求めていきたいと思える人が、本物だといわれ、人格の高い人物と言われる。ということを考えるならば、人格の高さをつくる最終的で究極の原理は、人間の心に宿る価値への情熱である。価値への欲求である。これほど人間にとって大事なものはない。**

**企業理念の最たるものは、最高の満足を与え最大の信頼を得る。そのための努力をしようというのが、感性論哲学におけるあらゆる職業に共通する企業理念、経営理念と言えるものです。 我々が仕事をする究極の目標は、最高の満足を与え、そして最大の信頼を獲得する。そこに仕事をすることの究極の目標があります。**

**経営的には満足度が四つの方向性があって、顧客満足度・取引先満足度・社員満足度・株主満足度。これらの満足度を追求することが、経営バランスという風に言うことができるものです。我々が最高の満足を与えることの対象は、まずはお客さん=顧客に満足を与える。一緒に仕事をしている仲間=社員皆に満足を与える。それから取引先、そして、株主。それを実現することが、バランスの取れた経営と言えます。そして最終的にお客さんから信頼され、また一緒に仕事をする社員からも信頼され、取引先からも信頼され、株主からも信頼される。これが仕事をしている人間、あるいは経営者の最高の勲章、誇りだと言えます。我々は常に、最高の満足を与え最大の信頼を得る、そのことを目的に努力しなければならない。全ての職業に共通する究極の経営理念はここにある。あらゆる面において最高の満足を与え最大の信頼を得るために努力するーそれが仕事をすることの究極の目標・理念であります。そのために何を自分のものにしなければならないか、それは人格の高さである。人格の高さとは、価値への情熱・欲求だ。それが最高の満足を与え最大の信頼を得るために、自分自身に要求される課題であります。**

**素晴らしい仕事・成果を出そうと思ったら、どうしても根底に価値への情熱がなければならない。それが故に人格を磨く第一原理と言うことができるものであります。そういう内容を持って仕事をするということが自分を磨くことなんだ。金ではない、金を目的に仕事をしたとき、心が腐る・汚れる。血の通った温かな心は吹っ飛んでしまう、なくなってしまう。人間性が歪む。最終的には仕事に失敗する。そして、不幸になる。仕事をする目的を金に置いたら、人間は金ゆえに真実を偽り、志を捨て、真実の愛を捨てて、金のある方向に行ってしまう。一瞬は金が儲かるかも知れないけど、結果として人生は不幸であって、また心の汚れゆえに仕事においても決して成功はできない。仕事をする最終の目標を、自分を人間として磨くところに置かないと、自分も素晴らしい仕事はできないし、また皆に満足を与えることができるような仕事をする力も持てないし、結果としては金に支配されている人間は、いろんな人から信用されなくなってくる。だんだんだんだん友達が無くなっていって、孤独になって不幸にならざるを得ない。その意味においても、人間性の基本である謙虚さと愛と成長意欲は大事な成功と幸せの原理と考えなければなりません。金を目的にしたら完全に血の通った温かな心は吹っ飛びますから。冷酷冷徹になりますよ。**

**そういうことからも感性論哲学では、職業とは何なのかと言ったら、職業とはその仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させる、という力を持っているもの。決して金儲けを目的にするものではない。職業の最終的な目標は、人間を本物の人間に鍛えあげるというところにあるんだ。経済活動の最終的な目標は金ではない、自分自身を人間として磨くというところにある。ここに、西洋人の仕事の仕方とアジア人の仕事の仕方の違いがある。アジア人は仕事を通して人間を磨いた人間を尊敬する。西洋人は仕事を通して金を持った人間を尊重する。能力と金を持った人間を尊重する。アジア人は仕事を通して自分を磨いた人間を尊重する。だから日本には、商道という精神が江戸時代においてつくられた。金儲けという活動を通して自分自身を本物という風に言うことができる人間に成長し、磨いていく。こういう活動を商道と言います。柔道でも元は柔術。柔術というのは格闘技、勝つか負けるかだけ。でも柔術が柔道になったのは、勝つにしても負けるにしても柔術を通して自分を人間として磨こうと思ったとき、柔術は柔道となって、そして文化となるんだ。だから今のオリンピックにおける柔道は、あんなもの柔道ではない。勝てば良いというものでは駄目。負けたとしても、ちゃんとお互いに挨拶をして戦い始め、お互いに礼儀を尽くして別れる。というそのけじめのある人間らしい心を持った所作に柔道という道、人間の心をつくるという道ができるのであります。東洋に商道という金を儲ける活動をすることによって自分自身を人間として磨いていく、という働き方がアジアにあるんだ。それは欧米にはないんだ。これはものすごく大きな文化の違い、人間としての価値の違い、と言って過言ではありません。**

**だから、これからアジア人は欧米人を超える新しい文明文化をつくって、そして欧米人がつくった科学技術文明よりも素晴らしい文明をこれからつくっていって、そして欧米人を助けてあげる時代に入っていくことになるわけですよ。歴史というのは前の時代を超えていかないと歴史ではない。衰退したのでは歴史はつくれない。より素晴らしいものをつくっていく努力が歴史をつくる努力だ。何故にこれからアジア人が、欧米人がつくった現代の文明を超えて、より素晴らしい文明をつくって欧米人を助けてあげることができる状態になれるのか。その一つの理由が、欧米人の目標は人間にはない。理性という能力と金と物という三つが欧米人の努力の目標なんだ。だけど、アジア人は人間の全ての努力の目標を、人間においている。茶を飲むという行為すら茶道になるんだ。それを通して人間を磨こうとする文化になっているんだ。掃除をすることすら、トイレを磨くことを通して自分の心を磨いて、自分を成長させようとしている。それがアジアの文化だ。茶道でも華道でも柔道でも商道でも芸道でも全部自分を磨く。自分を人間として本物に成長させていく。そこにアジアの全ての努力の目標が置かれている。**

**実際我々これから経済においても、金のために働く経済から人間のための経済をつくっていこうという段階に入っているんですよ。資本主義経済という金の奴隷になってしまうという経済のシステムをやめて、そして経済活動が人間を成長させる・幸せにすると経済活動をつくっていこうとなって、脱資本主義経済と言われているわけですよ。経済も人間のための経済に変えていこうというのが、その方向性なんだ。これから人間の全ての活動が人間を目的にしたものに質を転換させていく、という時代に入っているんだ。我々の仕事の仕方も金から人間そのものへと目標を変えなければならない。「何のため仕事をするんですか？」それは人間のため。自分のためだけではない人類のためだ。人間というものを全体として幸せにしていくことができる。そのための経済活動だ。そういう意識で仕事をしていかなければならない。アジア人が教えないと欧米人は知らない話なんだ。**

**欧米人はやたらに転職をして給料の高いところにどんどん行ってしまう。だけどアジアは、一生その会社に勤めて、家族的な意識を持って仕事をする。それはアジアの職業というものと欧米の職業というものの大きな違いだ。そこには人間を人材と考える、材料と考える欧米の資本主義の考え方と、人間を家族のように血の通った温かな心で大切にするアジア的な仕事の仕方との大きな価値の違いがあります。一時、アメリカは日本の家族主義的な社員の使い方に感動してそれを取り入れようと思ったんだけど、体質的に合わない。結局はアメリカは人間を人材として金を儲けるための材料として使って、そしてどんどん利益を上げるために活動させる形にまた舞い戻ってしまった。そして金融大恐慌という大きな破綻を迎えた。一時、日本はアメリカの能力主義と、人間を材料として考えて仕事をさせて金を儲けるという能率本位に傾いてしまったこともあったけど、今はそれを反省してもう一度日本的経営に戻ろうとする状況にあります。とにかく我々は、自分の働くことの目標を金ではなくて自分自身の人間的成長に置く。そういう経済活動の仕方をぜひ日本人として、誇りとして持ってもらいたい。我々はそれをこれから欧米人に教えていかなければならない、そういう使命があるんだ。我々は欧米人よりも素晴らしい文明をつくれるという可能性も持っているんだ。そういうことを考えて、これからの仕事の仕方を見つめていってもらいたいと思います。ということで最初の話は終わります。休憩に入ります。**

**それでは後半の話に入ります。**

**前半は人格の高さをつくるときのための実践的原理を話したんですけども、後半は精神的原理。意識の面からどういう努力をすれば良いのか、ということ話したいと思います。全部で四つの項目がありまして、第一番目は人に人格の高さを感じさせるということになるためには、自信がないといけない。自信のない人間はやっぱり人格の高さ、尊敬を感じさせることはできない。自信をつくるということのために自分がしなきゃならない努力が、信じるに足る自己をつくる、という課題であります。自分が自分で信じられないような人間を誰が信じてくれるんだ、となりますから、まずは他人から信頼される、尊敬されるためには基本的に「信じるに足る自己をつくる」ということをセントバーナードなんですね。この人格の高さというのも、これは他人の評価であって、「俺は人格が高い」と自分で言うことではない。他人から「あの人は人格が高い」と言われて、初めてその人の人格の高さは現実になるのであって、自分で自分が人格が高いと思っていても、人が評価してくれなければ価値はない。**

**現実の社会は、基本的に自分の価値は他人が決定するという原則によって成り立っております。自分がどんなに素晴らしい能力を持っていったとしても、自分の力が他人によって評価されなかったら一文の価値もない。自分を雇ってくれなければ、どんなに素晴らしい力を持っていても社会の中で生活できません。だから自分で自分の力を成長させていくのは、これは自己満足の世界であって、自己満足では現実社会の中では生きられない。他人からその価値を認められて、他人から評価されて、初めて現実の社会において生きていくことができる人間になれる。自分の価値は、他人が設定するという厳しい原則のもと我々は生活しなければならない。だけど、他人から評価されようと思ったら、それなりの評価がされるだけの力というものを自分がつくる努力をしなければならない。だけど現実には、よくあることですけど「俺はこんなに頑張っているのになぜ上司は見てくれないんだ」と、認めてくれない上司に不平不満を言う。そういうことはよくあるわけですね。これは有名な孔子の言葉の中にもそれに類する言葉があって、「人の己を知らざるを患えず 人を知らざるを患う」。他人が自分のことを認めてくれないと嘆いているようではいけない、認めるも認めないもない。認めざるを得ないというところまで自分を磨いていかないと他人はそう簡単には認めてくれない、ということ。不平不満を言っているだけでは駄目。これが大事な課題だと、孔子も大昔に言っているわけであります。とにかく、そういうことも含めて、信じるに足る自己をつくるという努力を自分自身がしないと、なかなか他人が信じてくれる、評価してくれるようになっていかない。人格の高さを人に感じさせるためには、自信を人に感じてもらえる力が大事なんだ。**

**人格の高さというのは、現象的には知識の量によって評価される。自分が持っている知識や技術が確かなものでないと、自信が湧いてきません。自分の持っている技術が不確かなものであったならば、何かしら不安を感じさせ、他人から尊敬されたり、他人から人格が高いと評価されることはなくなってしまう。自分の命から自信を湧き立たせようと思ったら、自分の具体的な内容を決定している知識や技術を確かなものにしていく、そういう努力をしていかなければならない。あまり使わない知識や技術は、ついつい不確かになってしまって、自分でも自信がないことになりかねない。とにかく、自分が仕事の上で使わなければならない、プロとしての仕事に関わる知識や技術というものは、常に自分がそれを検証して、ちょっとでも不確かなものがあったならば、それを常に確かなものに転換していくという努力をし続けなければならない。プロとしての消費者に対する社会的責任である。プロというのは、使う知識や技術というものにおいては、やっぱり消費者から見て「さすが」と感じさせるものがないと、格がないということになってきますので、人に「さすが」と言わせることができる水準の知識や技術を持つことが、プロとして仕事をしていく最低限度の目標ですよ。人に「さすが」と言ってもらえないような半端な力で、人の役に立とうなんてことはおこがましい。仕事をして金を取るからには、金を出す側からして「さすが」と言ってもらえる、客に「さすが」と言わせる力を持って初めて金が取れる。そういう気持ちを持っていないといけない。そうするためには、自分自身の知識や技術というものに確かな自信を持って使えるという状態にしておくことが重要になります。間違っても自分の口から、不確かなことを出すことは絶対プロとしては避けなければならない。**

**いい加減なこと言ってしまうと、それが取り返しのつかない、信用をなくすということになってしまう。それは自分自身の信用をなくすだけではなく、会社全体の信頼をも奪ってしまう。企業というものに就職したからには、自分自身が会社の評価を背負っているということを常に意識していないといけない。これは大事な義務です。外に出たときは自分が会社を代表している、自分が会社へ背負っている、自分の一言が会社の信頼を失墜させる、そういうことを常に考えていないといけない。プロとして金を取る仕事をするからには、自分の言葉に責任を持たなければならないし、自分の口から不確かなことは言わない。もし自分があんまりちゃんとわかってないということが仕事で出てきたならば、正直にそれを言って、「今はっきりしたことを申し上げることができませんので、ちゃんと調べて報告に来ます」と。そうすることで、「不確かなことは言わない人間だ」という評価になる。却って知らないことが、その人の信用を高めるということにもなってくる。このことはプロの仕事の仕方として大事なことです。だけど、多くの場合は残念ながら自分が不確かなのについうっかり言ってしまって、あとから調べたら間違いであったことに気付いて、謝りに行くこともせずに放って置く。そうなってしまうと、「もうあいつには頼まない」ということになってしまう。そうなると、自分も仕事ができなくなってしまうし、会社にも「ああいう人がいるところは信用できない」ということになって、損失になってしまう。そういうことになったら、大きな問題になってしまいますので、そういうことも考えなくてはならない。とにかくは、金を取る仕事をしている限りは、金を出す人間に「さすが」と思わせる。それがプロの条件、資格だということを常に忘れないで、決して軽薄な、不確かな言葉を口にしない。それをぜひ心してもらいたいと思うんです。**

**人格の高さというのは、結果的には知識の量というものによって表現されますので、信じるに足る自己をつくる、というのは自分の中に不確かなものをできるだけ少なくして、そして常に自信を持った言動ができる。そういう自分をつくる努力が、人格の高さをつくっていく意識的な面からしても大事な課題であります。とにかくは、プロとは一体何なのかということをよく考えてみてもらいたい。**

**とにかくは、仕事上自分が使わなければならない知識や技術において、決して不確かなことを言わない。不確かであった場合には正直に言って、そしてちゃんと調べて確かなことを報告する。そういうクセをつけるということは、非常にプロとして確かな生き方をしていくための大事な課題であって、それが限りない信頼・信用を社会から得ることになる。**

**第二番目の人格の高さをつくる原理は、謙虚さのない人間に人格の高さを感じることはない。傲慢になったとき、完全に人から非難され、軽蔑される。第一番目の信じるに足る自己をつくるというのは、自信をつくる原理ですけども、自信だけでは社会は生きられない。自信だけでは自信過剰になってしまう。その自信過剰さが、また人に嫌われてしまう。もう一つ必ずついていなければならないのは、謙虚さである。自信と謙虚さが人間の価値をつくる一対の原理だ。謙虚さだけでは弱さになる。なんか頼りない感じがする。一対となって初めて社会を生き抜く人間性、人間としての内容の確かさができ、人間性の基本ができる。つまり、第二番目は、命から滲み出る謙虚さをつくる。**

**客に対しては謙虚さをつくろうとしますが、相手が客ではないとなると、途端に傲慢さになってしまう人も少なくありません。これでは、人間としての本物性は消えてしまう。人間は常に不完全ということを心に持っていて、決して傲慢にはならない、という自分をつくってかないと人間性に安定性がない。どうしたら意識で謙虚にしなくては、と思うのではなく、いつでも謙虚さというものが自分の命が滲み出てきて、人にその謙虚さを感じさせることができるようになるか。またそういう人間性を持てるようになるのか、ということを考えないといけません。**

**謙虚さが滲み出てくる自分をつくっていくために、どんなことが大事なのか。基本的には二つの大事なことがあって、第一番目は、人間は誰でも長所短所半分ずつある。他人から嫌われ、軽蔑され非難される部分が半分ある。長所=良いところも必ず半分はある。そういうことがちゃんとかかってくることによって、どんな人と接していても、必ず相手から見たら「嫌だな」と思えるところが自分の中にはあるんだと。そういうことを知っていることによって、相手に対して傲慢な気持ちにはなれない。そういうことが出てくるわけです。またどんな人にでも自分よりも優れたところが半分はある、これが分かることによってどんな人も軽蔑しない、見下すことがない。必ず相手の中に自分よりもいいところが半分もある、そういうことを意識しながら、相手を見つめることができる。つまり、相手に対して傲慢な態度にはなれない。これも謙虚さをつくっていく大事な課題です。**

**ついついどんなときも傲慢さが出てしまうものです。相手を軽蔑したり、見下したり、否定的な意識になってしまう。その気持ちは常に目に出る。ちょっとしたことで「嫌なやつだな」とか「信頼できないな」というように、そういう気持ちが出てくると、自分では大したことではないと思っていても、相手に大きな心象、イメージを与えてしまう。「あの人は自分のことが嫌いなんだ」と思わせてしまって、結果として人間関係が壊れてしまう。仕事もうまくいかない。ということになってしまう。自分はそれほどのことをしていないと思っているのに、何かしら相手との間でギクシャクした気持ちになってしまう。どこかでそういう意識があって、それうっかり目に出てしまう。あるいは態度に出てしまう。そうなる場合が多い。そうならないためにも、どんな人でも自分にはない、自分よりも素晴らしいところが必ず相手の中にはあるんだ、という認識、自覚を持っていると、相手を見下げるとか忌み嫌う目つき、態度はなくなっていって、相手に良い印象を与えるような接し方ができるようになっていきます。人間観としてどんな人でも長所半分短所半分。どんな人でも自分の中には相手から見たら嫌だと思えるところが半分はある。そういうことを思っていると、なんとなく謙虚にならざるを得ない。そういうことで人間関係は常に穏やか、あまり相手に嫌な感じを与えない。そういう付き合い方ができるようになってくる。それが、いわゆる心遣いですので、その心遣いをすることによって相手は、「なかなか立派な人だ」と言ってくれる。**

**これが人格の高さを感じさせる第二番目の原理で、謙虚さのない人間に人格の高さは感じない。これらのことは、孔子の言葉にもあって、「過ちて則ち改むるに憚ることなかれ」と。間違ったと思ったら、すぐパッと誤ったらいい。それをなんとなくめんどくさいと思ったり、間違ったとわかっているのに何もしないでその場を去ってしまう…それだと相手には非常に大きなマイナスの印象が残って、相手から嫌われてしまう。そういうことになってしまいやすい。とにかくは、人間は不完全なんだから、「則ち改むるに憚ることなかれ」。決して謝ることに躊躇してはいけない。間違ったと分かったら、すぐ謝る。この竹を割ったような人間性が大事だ。その次に言っていることは、「過ちて改めずこれを過ちという」。人間は不完全なんだからいっぱい失敗をする、間違ったと思ったらすぐ謝る、しかし分かっているのに謝らないことが一番人間としては間違いなんだ。そういうことも言っております。**

**それからまたその次にどういうことを言っているかというと、「人の過や、各々其の党に於てす。過を観て斯に仁を知る」。これは非常に深い人間観なんです。どういう間違いをするか、どういうことで間違いをするか、そこにその人間の本当の値打ちが出てくる、ということです。**

**良いことをしたり、ことがうまくいっている間は、人間の値打ちにあまり上下が分からないんだけど、間違ったことをしたときにこそ、どういう間違い方をするか、どうするかによって値打ちははっきりするものだ。その人らしい間違い方をする。そして、その人の価値が分かる。それでその人を測る。そういう人間観を言っています。それが人間は不完全だということを原理にした人間に対する思い、考え方と言うことができるわけです。とにかく基本的には、人間は不完全だから決して完全性を求めるような傲慢な気持ちになってはいけない。相手の不完全さは認めて許さなければならない。また自分のダメなところは、気軽に謝る必要がある。決してそれは恥ずかしいことではないし、却って間違ったと思ったときに謝ることによって尊敬されるんだ。自分は間違って謝ったら相手に馬鹿にされると思うかは知れないけど、それは反対。パッと誤ったらむしろ尊敬されるんだ。また許してもらえるんだ。謝らないでいってしまうと相手に恨みを持たれてしまったりなんかして、人間関係は壊れてしまう。本当によくあることで、相手に迷惑をかけたことで、「そんなことぐらいは大して迷惑ではないだろう」と思って軽く見ていると、相手からしたら「なんかすごいむかつく」と。「なぜこんなことしたのに…」と、ずっと一生尾を引くこともある。ちょっとしたことでも謝る、このことはものすごく大事なこと。ついつい家族や毎日仕事をしている仲間だと、「許してくれる」と高を括って謝らない。しかし、それがしこりになってくる。例え夫婦でも親子でも友人・仲間でも、「ごめんね」と謝る。そうすれば元に戻るのに。謝ることで尊敬されることもある、「いいやつだ」と。そういう謙虚さは大事な価値です。**

**よく躾ということを申しますけど、基本は挨拶と返事と感謝と謝罪です。これが人間をつくる基本となります。これを子どもにさせるようにすると立派な人間になれる。挨拶は、心の結びつき、心の橋を渡す行為。理屈を超えた心の結びつきをつくる行為です。夫婦でも親子でも友人でも仲間でも、誰であっても親しい人だからこそ、笑顔で挨拶をすることが大事。それから返事は応答。質問をされたら答・応える。そういうことも大事な礼儀となります。名前を呼ばれたら返事をする。応じる、人間としての繋がりを大事にする行為です。その次は、感謝です。何か相手にしてもらったら、どんな小さなことでも「ありがとう」と言えることが、非常に大事な人間性の証となります。ちょっとでも迷惑をかけたら、「ごめんね」と謝る。そう言えることが人間の心の素晴らしさであります。躾と言うと子どもだけのものと思われがちですが、一生にわたるもの。人間性を持っていることを表現する大事な行為です。挨拶と返事と感謝と謝罪、これが社会生活を人間らしく過ごす人間をつくる4つの基本原理です。ここにもやはり謙虚さというものは全部出ているわけですよ。そういう謙虚な対応というものが、人から尊敬されるあるいは立派な人だと言ってもらえることになります。命から滲み出る謙虚さというのは非常に大事な人間としての心遣いですね。**

**次は第三番目、理想を持って生きる。理想のない人間に人格の高さは感じません。自分の人生の未来に何かしら大きな理想や夢や希望や目標というものを掲げて生きている、そういう姿に人間としての立派さ、人間としての正しい在り方を我々は感じるわけです。人間こそ理想に向かって現実を生きる生き方ができる唯一の存在であって、動物は与えられた現実にどう対応し、どう適応するか。目の前に現実に縛られた生き方しかできないんだけど、人間だけは未来に理想を掲げながら現実を生きる。現実を理想に近づけようとして現実を生きる、という生き方をするところに人間的と言える生き方が出てきます。理想というのは、現実から見れば高いところに掲げるものですから、現実に生きている人間が理想を心の中に持っていると、意識の構造の中に高さが出てくるんです。現実というものの上に理想があるから、理想を持って生きていることによって現実から高いものを意識して生きていることになります。そういう意識が出てくるので、人が見るとそこに人格の高さを感じるのです。そして、尊敬されるのです。だけど、「何がしたいの？」と言われて「別に大してしたいことはありません」と言うと、そんなことでは尊敬はされません。人格の高さを感じてもらえるはずがない。そういう意味でも理想を持って生きる、希望を持って生きるというのは、ものすごく大事な、人間的な素晴らしさをつくるための原理だと言えます。**

**だけど、ほとんどの人が今、そういう理想とか夢とか希望とか目標を具体的に持たないで、「なんとかやったらなんとかなる」という生き方しかしていないと感じられます。特に大きな目標があるわけではない、そういう人が多い。これが自分の価値を下げている。本当はどんな人でも皆、それなりの理想、夢を持てるはずなのに持とうとしない。もっともっと我々は理想とか夢を語る力を自分自身を積極的につくっていこうとしないといけない。特に夢さえあればどんな苦しみも耐えられる。しかし、夢がなければ、今の辛さに押しつぶされてしまう。弱い人間になってしまうんだ。理想とか夢を持っていることによって、今の辛さ、苦しさに打ちひしがれないで、今をたくましく生き抜いていく力が湧いてくる。ものすごく大きな生き方の違いになってくる。理想や夢も頭で考えて、持ってしまうと、残念ながらその理想が自分を苦しめるという風なことになってしまいやすいんです。理性で理想をつくってしまうと、その理想をなんとか実現しなければならないという思いが湧いてきて、自分が辛くなる。だから、理想というのは頭で考えたらいけない。自分の命から湧いてくる欲求として持たなかったら、その理想は自分の命に活力、力を与えてくれない。生きる力にならない。だけど、ほとんどの人が理想とか夢とか希望とかを頭で考えて持ってしまうので、却って理想を持つことによって自分の今の生き方が苦しくなってくる。自分がその理想を実現できないと思ってしまったりなんかして、辛くなってきて却って自分を苦しめる。理性でつくった理想は自分を苦しめる。だけど、命から湧いてくる理想は、命に喜びを与える。欲求として理想を持ったとき、人間はしたいことをするんだから、喜び・生きがいになる。**

**ということで、欲求としての理想が持てる自分をつくっていかないといけない。一体、一番人生において大事な、欲求として理想はどうしたら持てるのか。どうしたら理性で考えた理想ではなくて、欲求として理想が持てるのか。欲求としての理想とは、「俺はこうなりたい、こうしたい」というものが、欲求としての理想と言います。欲求というのは、まだ実現されていないから理想なんです。実現されたら理想ではなくなります。欲求としての理想を持ったとき、本当の素晴らしい人生が始まる。喜びの人生が始まる。どうしたら一体、欲求としての理想が持てるのか。そのためには自分が自分に対して、理性で問いを発する。「どんな人間になりたいのか？」「どんな仕事がしたいのか？」「将来、どんな生活がしたいのか？」「どんな人間になりたいのか？」というのは、つまり、どんな男・女になりたいのかということ。男の場合は、「俺はこんな男になってみたい」というものを自分の命から呼び覚ます。もし出てこなかったら、なりたい男を探す男探しをしないといけない。そのために、いろんな本を読んだり、映画を観たり、人物に会ったりと、なりたい男像を探し求めていかないといけない。経営者なら、どんな経営者になりたいのか。「俺はこんな経営者になってみたい」という欲求を呼び覚ましたら、そうなれるように努力することが喜びなんだ。女性でも「こんな女になってみたい」「こんなお母さんになりたい」、そういう具体的な目標を立てて、そうなれるように努力をし始めたら、そこに喜びが生まれてくる。自分が成長を感じる。それぞれ自分が置かれている立場に応じた理想を欲求として持つ、そういう生き方を覚えないといけない。どんな仕事がしたいのか、どんなことがしたいのか、そういうことを通して、自分はこんな仕事がしてみたい、そういう命から湧いてくる欲求を持ったならば、そうなれるように生きていくことが生きがいになってくる。将来どんな生活がしたいか。本当にリッチな生活がしたいと思ったら、そうなれるためには今何をすべきか。そのためにもこんなことしておこうと、目標を実現するための生き方ができ始めるわけです。**

**欲求としての理想がないと、結果として「まあ適当にやっていたらなんとかなる」という現実に流された生き方になってしまって、なかなか自分が思うようないい生活はできない状態で人生が終わってしまうんですよ。欲求としての理想を持ったら必ず実現されます。なぜなら、欲求というのは行動力なんだ。欲求が湧いてこなくなったら、人間は行動を止めるんだ。湧いてくる限り、人間は行動をし続けるんだ。本当に「こうしたい！」と思ったら寝食を忘れる。だから成功するんだ。本当に自分はこうしたい・こうなりたいというものを持ったならば、必ずそれは実現されるんですよ。理性で考えたことは命に苦しみを与えるから、なかなか実現されない。実現されたとしても辛い、苦しい。しかし、欲求としての理想を持つと、解放感があってしたいことをするから自由なんですよ。そのように、欲求としての理想を持つことが、人間として楽しい生き方をつくってくれる。そういう喜びのある生き方をして、そこに人間は素晴らしさを感じて、「あの人はすごい、立派だ」と言ってくれる。人がどれだけ大きな理想や希望を持っていても、その人の生き方が辛そうなら人間はその人を尊敬しません。喜々としていれば、人に「すごいな」と思わせるわけです。努力に喜びがある。努力が嫌そうで辛そうなら、誰も尊敬をしません。石川遼でもイチローでも皆努力をしているんだけど、その努力がなんとなく輝いている。喜びがある。だから、すごいなと思う。プロというのは、このことに関しては誰にも負けないぞ、というものを持っていないといけない。趣味でもいいですが、仕事に中にあるとそれに越したことはない。どんなことでもいいですが、これなら俺は大したものだ、と思えるものを持つことが、楽しい素晴らしい人生を生きるための目標です。**

**現在のようなグローバル化された世界の中では、このことにおいて俺は世界一だ、と言えるような力をつける目標を立てたら、素晴らしい人生が始まりますよ。世界一になろうと思ったらなれるんですよ。なろうと思わないからなれない。世界一になろうという夢を持たないからなれないだけの話なんですよ。「俺は世界一になる」と思って努力をし始めたら、なれなくてもそれに近いところまではいける。「世界一になる」という希望を持って生きている値打ちのある人間になれる。富士山に登ったのは、登ろうと思った人間だけですから。富士山に登ろうと思っていないのに登ってしまっては病気ですから。病気になってどうするんだという話ですから。とにかくは、何かしら素晴らしい、高い目標を立てて、そしてそのために現実を生きる。そのことをすれば、例えそれが実現されなくても、そういう理想を持った人間の素晴らしい生き方はできますよ。そのことによって、現実から見てそれは高いところにあるから、人格の高さを感じさせる。そういう力を持つわけです。**

**最後の人格の高さをつくるための精神的原理は、理念です。「理念への問を持って生きる」。理念への問とは、人間としていかになすべきか、いかにあるべきか、いかになるべきか。この三つの問いは、人生を生きるための三つの問いと言えます。理性的なものだと思われますが、だけど人間が本当に真剣に人生を生きようとすれば、この問いは理性という能力を持った人間の感性から湧いてくる問いとなります。「〜べき」となると理性的に見えるかもしれませんけど、問いはすべて感性から湧いてくる。いかにあるべきかと言われる理念への問は、理性という能力を持った人間からしか湧いてこない問いなんだ。この問いが、人間を人間的な生き方に導いてくれる。だから、この問いを理念というんです。**

**いかにあるべきか、いかになすべきか、そういう問いを持って生きることによって、自分で自分を律する。自立の原理を持つ。他人に言われたからするのではない、自分で自分を動かす、そういう生き方がこのことによってできるんです。それがまた尊敬される。自分がこうするべきだと思うからやっているんだ、この生き方が他人から尊敬されるんです。理想と同じように理念というのも、現実より高いところに掲げるものですから、そういうものを持っていると意識の中に高さが出てくるから、それを見て人は尊敬してくれる。人格が高いとなる。そういう構造が命に出来てくるわけであります。人間性に高さが生まれてくる。しかも理念への問いというのは、人間の生き方に品格というか、なんちゅうか本中華冷やし中華と言うか、尊敬に値する、そういう高いところのものを目指しているという、そういう意識をした人に感じさせる、そういう結果になってくる。**

**会社というのは、往々にして上司からの命令に従って動く、そういう形になってしまって、ついつい自分が無自覚である奴隷として使われるということになってしまいやすい。それでは、人間としての価値がない。だから、本当に我々が人間としての誇りを持って生きようと思ったら、命令で動く場合でも「単に俺は命令されて家畜のごとく動いているのではないぞ。俺もそう思うからやっているんだ」という意識を自分のなかにつくっていくことが、自分の仕事への誇りなんですよ。命令されたからと、受け身でするのではなくて、自分もそうするべきだと思ったから、大事だと分かっているからやるんだ、と。「俺は奴隷ではない。俺は自分の肉体を意志と決断によって動かしているんだ」という自立した人間の誇りを持って仕事をしていくことができるわけであります。会社の業務というのは、すべて何かしらの理由がある。必然性があって、無駄な仕事はない。自分が訳を考えれば、なるほどと納得できるはず。全体的な視野を持っていないと分からないかもしれませんから、仕事を与える上司は常に、部下になぜこの仕事をやってもらいたいのかを示す必要がある。なぜ、この人に頼むのか。なぜ、この仕事をすべきなのか。ちゃんと説明をするべきで、その仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを分からせて、しっかり仕事をしてもらう。そういう仕事のさせ方をやっていかないと、社員を人間として働かせることにはなりません。単に命令でやらないといけないからやるんだと言うようでは、確たる納得をさせずに仕事をやらせるようでは、人間として人を使うやり方ではない。本人としては単に命令して動かせるのではない、自分もそうするべきだと、それが正しいと思うからやるんだと、自分で自分を律する=自律の精神を持って仕事をするのが、大人としての生き方として、会社・企業においては全ての社員に求められることであります。**

**そのことによって、その会社において自分が仕事をするということに、やりがいや生きがいが生まれてきて、自分の生き方に正しさが感じられてくる。堂々と自分のなすべきことができる。自信を持って生きるという態度がつくられていきます。どうして理念への問いということを言うかと言ったら、こうするべきだということを自分が持ってしまうと、ついついそのことによってそうしない人間を非難するという傲慢さが出てきてしまう。常にいかになすべきか、いかにあるべきか、ということを自分に問いながら、この場合はこうするべきだという生き方をしていると、人に厳しく当たるのではなくて自分で自分を律するという力ができてきて、それが「あの人は立派な人だ」と人に言わせる姿に見える。人を責め始めたら嫌われてしまう。だから答えを持って、答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。答えを持つのではなくて、常に今どうすればいいか、今どうあるべきかを常に自分に問うて、自分は今こうするべきだと思う、と自分に自信を持ってやっていく。そういうところに人格の高さというものが生まれてきて、高潔なる人物という評価が出てくることになるわけであります。答えを持って、答えに縛られると対立をつくってしまって、却って自分の人間性を悪くする。答えに縛られないで、常に今いかにあるべきか、いかになすべきかを問いながら、その時その時に的を射た答えを出して生きていく。そこに自分で自分を律して生きるという人格の高さがつくられていくことになります。**

**ということで今日は、人格の高さをつくるという話を中心にしてきました。次回は人格の深さをつくる。その次は人格の大きさをつくる、そういう順番で人格を磨く話を続けていきたいと考えております。どうもありがとうございました。**